

CIEC Newsletter

お知らせ

<2006PC カンファレンス>

開催テーマ 自由な学びか、トレーニングか ～教育と IT～

開催日時：2006年8月3日(木)～5日(土)

開催場所：立命館大学衣笠キャンパス

詳細は下記サイトからご覧いただけます。

<http://www.ciec.or.jp/event/2006/>

<学会賞>

2006年度学会賞受賞候補者推薦募集

公募締め切り 2006年4月30日(日)

CONTENTS

<CIEC 研究会報告>

- ・CIEC 第57回研究会報告 2
- ・CIEC 第58回研究会報告 3
- ・CIEC 第59回研究会報告 5

<2006PC カンファレンス>

- ・2006PC カンファレンス開催速報 7

<CIEC 活動報告>

- ・第2回運営委員会報告 7

<CIEC からのお知らせ>

- ・2006年度学会賞受賞候補者推薦募集 8
- ・新年度会費及び会員名簿変更手続き 8

CIEC 会員状況

(2006年3月30日)

<個人会員 848名>

教員 622、大学職員 16、
院生 49、学生 5、
生協職員 88、企業 27、
研究員 8、その他 33

<団体会員 94団体>

企業 31、生協 58、
大学 2、高校 1、
法人 2

CIEC ニュースレター

2006年3月30日

発行：CIEC（コンピュータ利用教育協議会）

編集：CIEC 運営委員会

〒166-8532 東京都杉並区和田 3-30-22 大学生協会館

TEL 03-5307-1195 FAX 03-5307-1196

e-mail jim@ciec.or.jp URL <http://www.ciec.or.jp/>

CIEC研究会報告

<CIEC第57回研究会報告>

テーマ「プロジェクト学習を支える教員・協力者ネットワーク」
日時 2005年11月26日(土)14:00~17:30
会場 大阪あべの辻調理師専門学校 調理本館

地域と学校の新たな絆づくり

- 日本型ネットデイを事例として -

和崎 宏 (NPO 法人はりまスマートスクールプロジェクト理事長)

「新しい教育の創造」のための学習会

- 関西「食」プロジェクトへのお誘い -

大木 誠一(CIEC 小中高部会世話人・神戸国際大学附属高等学校)

社会変化の担い手としての学校

- 学校と学校外のアクター間での生産的協働のモデル -

山住 勝広(関西大学人間活動理論研究センター長)

平成17年11月26日(土)大阪あべの辻調理師専門学校において小中高部会企画の研究会が開催されました。開催趣旨として、「プロジェクト学習」を成功させるには、実践者である教員と協力者の人的ネットワークが不可欠であることに注目し、実践例と理論の両面から発表をいただき、CIECが人的ネットワーク構築の場の提供に貢献できないかを考える、というものでした。

まず初めに、「地域と学校の新たな絆づくり - 日本型ネットデイを事例として - 」と題して、和崎宏氏 (NPO 法人はりまスマートスクールプロジェクト理事長)が、持ち前のユーモアを交えて、終始人をひきつけて放さない濃い内容の講演をしていただきました。

そもそも1994年に米国サンフランシスコで始まり、その後シリコンバレーを基点として全米に広がった Netday(シリコンバレーにおいては、ハイテク企業などが資金と機材・線材等を用意し、町の電気屋さんや保護者の中のその道のプロがボランティアとして人的支援し、学校内に LAN を構築するべく配線工事一式を行う日)。その日本版を成功させるにあたり、阪神淡路大震災の教訓(非常時には一つのおにぎりを分け合って食べる暖かい心があった)から、平常時にも支えあう地域社会を実現したいという昔の日本人の気持ちをそのまま、Netday の思想につなげられたところが興味深いお話の始まりでした。今日の学校現場を取り巻く多くの要素(行政・教委・地域・企業・保護者)について、「総すくみ環境である」と指摘され、実践者から見た、困難な現実を浮き彫りにされました。

次に、米国の Netday についてきっかけと広がり詳しく説明いただき、まさしく、行政・地域の企業・学校当事者(生徒・教師・保護者)との連携のすばらしさとボランティアの共同体の大きな力を知りました。

和崎氏は、日米の学校や教育に関する環境の違いとして、アメリカは1)歴史的に学校と地域が深い関わりがある、2)企業が地域や学校に貢献する意識が高い、3)宗教的にもボランティア精神が高い、などの特徴をあげられ、反面日本では、「平等」を建前とする教育行政に Netday は馴染みにくく、さらに行政予算を伴わない実施は困難であるという現実、先導的な事例も数箇所であったが、皮肉にも e-Japan 戦略

により、公費で校内 LAN 整備の話が出たことが、ブレーキになったと、などの厳しい背景を説明されました。

その上で、いくつもの Netday を企画運営された経験をもとに、重要なポイントや成功の秘訣を具体的にスライドで提示され、どのように計画準備し、仕掛けを作って前日・当日を迎え、当日の運営は本作業の配線工事のみならず、保護者中心の昼食の提供、どこでどのような工事が行われているか、またその進捗状況の情報の公開と共有などをビデオデータで見せていただきました。驚いたことに、その学校はその後どうなったかという報告もあり、次々と第2弾・第3弾とプログラムが準備されていました。

「参画と協働」という言葉で表現されていましたが、このことは、他の多くのことに応用できることであり、知人を頼るだけではなく、異業種の新たな人間関係を作るなど、いろいろな人が協力することで成功するであろうプロジェクト学習を目指す、小中高部会の関西地区のこれからの活動に大いに参考になりました。また、基本が「自発」であることは仕掛け如何でいかようにも変化することは授業においても重要な鍵であると再認識できました。

二番目に、短い時間でしたが、大木誠一氏 (CIEC 小中高部会世話人・神戸国際大学附属高等学校)が、現在大木氏が中心となって活動が始まった「新しい教育の創造」のための学習会(関西「食」プロジェクト)の内容を紹介され、多くの方の参加を呼びかけられました。

三番目に、「社会変化の担い手としての学校」 - 学校と学校外のアクター間での生産的協働のモデル - というテーマで、山住勝広氏 (関西大学人間活動理論研究センター長)に講演をいただきました。

改革という言葉が飽きるほどあふれかえる今日、求められる教師の資質はどのようなものか、学校という場所や学校制度がどのように変わってゆくか、そのなかで、主人公の学生は、どのように考えて進路を決めてゆくのか、という話題から、進路の選択で受験勉強一直線だけでなく、多様な学生を受け入れて、学校を活性化させる、つまり確実に、教育の有り様に変化している。このことは産業構造の転換、例えば機械・電気など、単独ではなく広く相互に関与しているということでした。いまや、ワンサイズキッズオールではないことから、子供たちは多様な潜在力を示していて、教師や学校がその多様性に対応していないのではないのか?教育は医療と同じであり、その子はこういったライフチャンスをもっているのか、ポテンシャルを広げてやるのが教育であるということも話されていました。

都市において人と人の絆を確認することはできなくなっている、そんな中で若者が力を発揮できる場は何なのか?逸脱することや破壊することで、自己主張する若者が目立つ現代、若者が自分たちの社会に貢献でき、認識できる仕組みが必要であることを強調され、社会環境をよりよくするアクションに関与し、参加できるシステムが必要であるとのことでした。

学びには2種類の価値があり、一つはよい成績を得るための交換価値、もう一つは、生活や生きるために役に立つ使用価値である、このために人は学ぶのであり、ゆえに、人間の活動システムとして、コンセプトが大事であり、コンセプトは国境を越え、人々が理解できるものであり、またコンセプトが媒介となり、次の人間の活動が作り出されるということでした。社会的なネットワークをシステムとしてパートナーシップを築き、拡張的学習 expansive learning のサイクルを生み出し支援しフォローする、そこで教師同士がバラバラだ

と、町医者が糖尿病を治療しながら、別の大学病院では勝手に心臓の治療をしているようなもの、という山住氏のたとえに、多様化する学生・社会、それに対応できる教育者・指導者の資質をニュアンスとして感じ取ることができました。

山住氏は、予定時刻を過ぎてまでも熱心に語ってくださり、次々と質問がありましたが、閉会后まで応えてくださり、聴講者には有意義な両氏の講演でした。学校という場を中心に、どうネットワークを形成できるか？学校の中の教師と生徒が、外のネットワークとどうかかわっていくか？という大きなテーマのもと、今後の別の機会にも論議され、また実践に利用させていただきたいと思いました。最後に、会場としてご協力いただきました、大阪あべの辻調理師専門学校様に、感謝を申し上げます。

(文責：辰島裕美)

< CIEC第58回研究会報告 >

テーマ Flash を用いた情報教育の実践と Studio8 体験学習
日時 2005年12月3日(土)13時~17時
場所 立命館大学びわこ・くさつキャンパス
アクロスウィング1階情報語学演習室
司会 綾 皓二郎(石巻専修大学)
参加数 22名(講演者を含む)

「情報をデザイン(設計)する学び」
木村 健一(はこだて未来大学)

「臨場感がある情報教育 WBT システム：FCS のカスタマイズ事例紹介」
安岡 広志(東京情報大学)

「Studio 8 の紹介と体験学習」
三木 功次(マクロメディア株式会社)

はじめに

ウェブ上でアニメーションを公開する手段として、Flash は今や必要不可欠となっており、Flash を情報教育全般に活用される具体例も着実に増えてきた。今回の研究会は、前半で先駆的な実践事例を大学教育の現場から報告していただき、今後の具体的な活用方法について相互に議論を深める機会を持つことができた。また、後半では Flash 最新版を含むウェブコンテンツ制作管理パッケージソフト Studio8 の新機能をメーカー担当者からデモを交えて紹介してもらい、さらに特別講師によるワークショップ形式の体験学習を実施した。この後半部分を付け加えることによって、はなはだ短時間で表面的ではあるものの、一方的な事例紹介にとどまらない、双方向的な「学び合いの場」を参加者全員が共有することができたように思われる。以下に、当日講演者の発表要旨と体験学習の概要をまとめて報告する。

「情報をデザイン(設計)する学び」

木村 健一(はこだて未来大学)



ちょっとした手作り Web サイトでも、動的で手の込んだ演出が一般的になってきた。直感的にすっきり操作できれば良いのだが、しばしば面倒な事になっている場合がある。せっかく色々な工夫をしたのに、ちらちらして見難いとか、操作手順がさっぱり見えないとか、散々な評判が利用者から寄せられたりして、がっかりした体験をお持ちの方もいるかと思う。

Web デザイナーは、こうした事態を避けるため様々な方法をとっている。公開後に、利用者からの声を受けて改良するのは勿論だが、評判を悪くしないためにできるだけ短時間に対処できるよう事前の準備に重点を置くようにしている。特に仕組みが複雑な場合には、設計段階で操作手順の大きな枠組みが利用者にとって使い易いかどうかを試すペーパープロトタイプングと呼ばれる方法が使われている。

ペーパープロトタイプングは簡単に言えば仕組みを手書きした「紙カード」を用いて利用者試験を行う事をさす。開発者が利用者役と PC 役を分担し、紙カードだけを用いて Web サイトの利用手順を試すのである。利用者役は、「ポインタを動かします!」とか「Aアイコンを押して、B画面に行きます!」というふうに具体的に発話し、PC 役は紙カードを入れ替えて対応する。不都合があれば、その場で開発者が手書きでちょいちょいとデザインを変えたり操作手順を組み替えたりという事を何度も行う。

こうして作り上げた操作の枠組みを大きな模造紙に貼り、「遷移図」の原型を作る。遷移図は操作手順をまとめたもので、PC を使った本格的な作業時には机の脇に掲示したりする。最終的に Web サイトの中でサイトマップなどと称して一部が利用される場合もある。

少し前までは、こうした利用者試験は開発後に行われる事が多かったが、システムの複雑化に伴って事前や作業中に頻繁に行われるようになった。頻繁なほど利用者の多様な要望を反映できる事がわかってきたからだ。しかし、一方でシステムをその都度書き換えるのは結構な労力を必要とする。そこで、紙カードを使って事前にできるだけ問題点を洗い出すのである。

プログラムのように膨大な記述があるものは、開発者のやっている事をなかなか外から見ることができない。一般的に人工物は作っていく過程を共有して吟味・推敲する事がより良いものを作る事につながる。記述を簡単に外化できると、多様な立場の人が開発にかかわり、吟味・推敲が幅広くできるようになる。紙カードは外化を促進する便利な道具だということができる。

簡単な手作り Web サイトでも、この方法を使うことで利用者の評判は確実に上がるし、改良を加えた場合には何処に手をつけ、どのように変えたのか記録でき、一望に見渡すこと

ができる。つまり改良の過程を客観的に見る(外化)事ができるようになり、吟味・推敲の作業を十分に行う環境作りにつながり、Webサイトの質的な向上に簡単に取り組めるようになるというわけである。この方法は、Webデザイナーを含む広範なシステム開発者を養成する学習プロセスにも積極的に導入されている。

「臨場感がある情報教育 WBT システム：FCS のカスタマイズ事例紹介」

安岡 広志(東京情報大学)



本報告では、Flash の持つ特徴を活かした本学における情報教育活用事例を紹介する。

表現するツールとして Flash のスクリプト系言語は有効である。本学では、情報の活用、処理、可視化、情報の表現という目的で情報教育の中で取り入れている。学生は様々なアニメーション表現を習得し、Web制作を行ない、その後 Action Script の基本を学び、さらなる表現を形にしていくという段階的な授業を計画した。さらに表現をすることの意義を自覚し、学生の個々にもつ発想能力を引き出すことへ Flash はとても面白い効果が得られた。当然、使い方を知ること大切ではあったが、短い演習時間を操作方法にあてることが最小限にし、WBT 教材に充実した補助教材を用意した。それは動くマニュアルの仕組みをもっている。さらに、クイズ形式の Flash 理解度テストとサーバを介した CGI 連携による動的集計グラフ等がリアルタイムで表示されることで、わくわくした臨場感を生み、さらなる学習意欲を高めるという結果が得られた。e-Learning に見られる問題点として臨場感の不足、習熟度確認の不明確さなどの問題がある。「何を見せ、何が学べるのか、学習効果は上がるのか」という課題に対して、Flash による教材は今までに無い新しい手法・切り口を試みることができた。この Flash WBT システムは様々なコンポーネントを使用することで外部 Text データを流し込むだけで様々な臨場感ある教材へと変化することが可能である。

次に Macromedia Flash Communication Server MX for Linux (以下 FCS) をベースにした Web アプリケーションを紹介する。FCS は常に同期を取ることが可能であり、臨場感やスムーズなコミュニケーション環境を得ることができる。瞬時に遠隔地での複数参加による Web カメラを介し、相互コミュニケーションを図る複数参加型 TV 会議が構築できる。システム面における負荷を自由に分散することも特徴である。各 Web カメラから発信されている映像はサーバへ送信され、FLV 形式でストリーミング配信している。FLV 形式のデータこそが独自圧縮でありサーバ負荷を激減させている。参加する側はインターネット環境とブラウザのみで参加できるといったところが特徴である。そして Text・音声・動画・ホワイトボード機能などが同時に利用できる。FCS は既存のストリーミングサーバや TV 会議システムなどによる負荷率とは比較にならない軽さを有している。また Flash Player を利

用することから、各ブラウザでの互換性(Compatibility)が高く、インターネット利用者の約 98%が利用していることからクライアントへのユーザビリティを考慮したシステム構築ができる。問題点としては、システム全体を制御する意味で、UNIX サーバ管理経験とセキュリティ面での人的負荷がかかるのが難点である。だが、Flash の軽いデータ(音声や動画も含む)や自由なカスタマイズ性は、予備学習の支援、学習機会の提供などに今後益々、インターネット配信ならびにマルチメディア教材としての有効活用が期待されると思われる。

「Studio 8 の紹介と体験学習」

三木 功次(マクロメディア株式会社)



本日は、前半で木村・安岡両先生から Flash を活用した情報教育の実践報告があったので、メーカーとして、同報告の内容に含まれる Flash および Studio の機能等をレビューしながら、新たにリリースされた Studio 8 について簡単にご紹介する。

弊社のウェブサイト

(<http://www.macromedia.com/jp/resources/education/>)をご覧いただくと、さきほど両先生からご報告がなされた内容を含めて、全国の大学および初等・中等教育機関などにおける実践事例の一部を閲覧していただくことができる(「教育ソリューション」の「導入事例」を参照)。

また、本日のハンズオン(体験学習)で実際に使う予定の Studio 8 について、もっと詳しく知りたい、あるいはより突っ込んで使ってみたい方は、弊社のダウンロードサイト(http://www.macromedia.com/jp/downloads/studio8_trial.html)から体験版を入手し、さらにオンデマンドセミナーのページを閲覧(<http://www.macromedia.com/jp/software/studio/ondemand/>)していただくと、画面上のアニメーションを見ながら、自学自習を進めることが可能となる。

ところで、最近教育機関に限らず、Flash が話題になる機会が多くなっているが、その理由は主に次のような点にあると思われる。

- (1)世界中で使用されている PC の約 98%に Flash が搭載済みであること
- (2)PC に限らず、携帯電話やカーナビなどの液晶画面上でも再生可能であること
- (3)様々なシステムとの互換性が高く、事実上の業界標準であること

上記のような利点があるために、今後 Flash Platform という 1つの「基準」を前提とした次世代ソフトウェアの開発が進んでいくのではないかとと思われる。

これから、約 1 時間余り、実際に参加者自身のマシンで Studio8 を使ってみていただきながら、今回の新製品において旧製品から仕様変更となった部分の機能などを適宜紹介していくことにする。ハンズオンの指導は、弊社認定トレーナ

体験学習中の風景



(文責：上村隆一)

< CIEC第59回研究会報告 >

『学生どうしの学び合い』を基軸にした、大学生協のスキルアップサポート」

日時 2005年12月17日(土)18:30~20:30

会場 パシフィコ横浜 会議センター3F

報告者 武内 大隼(北海道大学)

小野田 陵二(京都大学生協)

原田 隆嗣(麻布大学)

パネリスト 小林 昭三(新潟大学)

| | | | |
|----|-----|----------|-----|
| 参加 | 37名 | 教員 | 3名 |
| | | 大学生・大学院生 | 15名 |
| | | 生協職員 | 19名 |

■開催趣旨

まもなく2006年を迎えようとしていますが、教科「情報」を学習した新生が大学へ入学してくる2006年、大学全入時代を迎えると言われている2007年、国立大学の法人化、取り組みが拡がりつつあるパソコンの必携化など、大学でのコンピュータ利用環境に影響をおよぼす大きな変化が、この数年間で起こりつつあります。

これらの変化によって、私たち大学生協の教材・学習用パソコンの販売・サポートはもとより、大学における情報リテラシー教育も大きな転換期を迎えていると言えます。

これまでCIEC生協職員部会が企画したPC必携化についての研究会では、大学と生協のパートナーシップ構築において、「大学の教育・研究内容に根ざしたサポートや学習機会の提供」が一番重要なポイントとなることが議論されてきました。

こうした流れの中、CIEC生協職員部会では、これまでのアフターケア型や教育型の学習機会だけでなく、『学生どうしの学び合い』による学習機会にこそ、今後の大学キャンパスにおけるコンピュータ利用学習のあり方についてのヒントがあり、「学び合いの場」の提供が私たち大学生協の責務になっていくのではないかと考えています。

今研究会ではその裏づけとして、近年各地の大学生協で行なわれつつある、学生のキャリア形成も視野に入れた『学生どうしの学び合い』を基軸にした取り組みについてご報告いただき、今後の展開や展望について議論できればと考えていま

■報告

開催趣旨にもあるとおり、この間の情報教育及びコンピュータ用環境の大きな変遷により、コンピュータの提供・サポートなどにおいて、わたしたち大学生協に求められるものも大きく変わりつつあります。そうした中、大学の情報リテラシー教育を補完する役割を担うべく、各大学生協でいわゆる「パソコン講座」の取り組みがなされてきています。

近年の大きな流れとしては、学生中心の組織である大学生協らしく、入学時にコンピュータを購入した学生に対し、先輩である上級生がカリキュラムの作成も含めて「パソコン講座」を運営し、実際に教える立場に立つというスタイルが確立されつつあります。

このことは新入生が「パソコン講座」という導入時教育に親近感を持って入り込めるということだけでなく、教える側に立つ学生自身も、その運営課程において自ら学習・成長しているという成果に基づくものと振り返られています。こうした取り組みに対し大学の教員からは、単なる販売にとどまらない大学生協の取り組み姿勢、学生同士の主体的な学習態度や、正課の情報教育ではまかないきれない(あるいは取り扱いにくい)内容についても多くの学生に学んでもらえることなどについての評価が出されつつあります。

このような背景をもとに設定した研究会に、多くの学生に加え、教員の方のご参加も得られたことそのものも、これらの取り組みが持つ意味に共感を抱かれたことによるものと感じております。以下に実践報告とパネルディスカッションでの議論内容を簡単ですがまとめさせていただきます。

京都大学生協の新学期の取り組みについて

小野田 陵二(京都大学生協)



都大生協の小野田さんからは、学生が講師となり行なった問題解決型のPC講座についてご報告をいただきました。前年までの経験をもとに、他大学の実践例も取り入れることにより、受講生や運営に関わった学生、大学の教員からも高評価を得られたようです。アプリケーションの機能そのものを細かく指導するのではなく、課題を与え対処方法を学ばせることで、受講生が自発的に成長していくことを目指した運営がなされています。そのことにより、講座開始当初はまったくわからなかったメールマナーが身についたり、実際の講義でのプレゼン課題をスムーズにこなせるようになったりといった成果が見られています。教員からも、大学では教えない内容(レポートの書き方など)についても取り上げているといった面で評価をいただいたそうです。

麻布大学生協の新学期の取り組みについて

原田 隆嗣(麻布大学獣医学部1年)



麻布大学の原田さんからは、「学生が使うものは、学生が一番知っている」ということを前提に行なったパソコン提案の取り組みについてご報告をいただきました。パソコン講座についても学生が行なうことにより、運営する学生自身も学習・成長することができる大きな魅力であることが語られ、「学生が使うものは、学生が一番知っている」という前提に立つと、学生が中心となって大学生協がパソコン講座を行なうことは、ごく自然な流れであると提起されました。

北海道大学生協のPC Mastersの取り組みについて

武内 大隼(北海道大学理学部3年)



北海道大学の武内さんからは、新学期パソコンの機種選定・販売、パソコン講座の企画・運営、そしてサポートまでの一環を学生の手で行なっているPCマスターズの活動についてご報告いただきました。「大学生活に必要なパソコン活用能力を習得すること」を目標とした場合、必然的にゼミでのプレゼンやレポートの体裁、フリーウェアの活用方法などが題材としてあがり、そうした面から経験豊かな先輩学生が新入生に対し教えるということに意味が出てくる、そうなれば当然、高校や大学の情報教育とは別の役割を果たせるのではないかと提起でした。今後の課題としては、デジタルデバイドの問題や、情報モラル教育、情報教育の大きな変遷の中での全国的な情報共有の必要性などがあげられました。

パネルディスカッション

小林 昭三(新潟大学教育人間科学部教授)



パネルディスカッションでは、まず小林先生から、それぞれの取り組みにおいて、学生自身が柔軟にプランニングから運営まで行なうことを通して、自ら力をつけていること、そのことにより学生の持つパワーがより一層強まっていることに対しご評価をいただき、またご自身の大学でのTA導入の取り組みのご紹介とあわせて、一連の取り組みにより「あらゆる学問は学び合いだということ」を学生自身が理解しつつあるのではないか」とお話をいただきました。

以下が会場を交えた討論のポイントです。

- ・学生が潜在的に持つパワーを、「学び合いの場」を作ること
- ・で生かしていくことの重要性
- ・情報教育という分野は、排他的な専門領域ではなく、重要なのは教える側の資格ではなく、教える側・教えられる側にとっての成果
- ・だからこそ、学生自身がコンテンツ作成や運営に関わることの意義があるのではない
- ・大学の正課の情報教育と学生同士の学び合いは相反するものではなく、連携・補完し合うことで「学ぶ機会」をより一層広げていくことができるものである
- ・今後の懸念事項は、セキュリティやモラルといったITリテラシー教育と、デジタルデバイドへの対応であり、これは正課の情報教育でも同じことが言える

■まとめにかえて

大学生協という立場からは、「学生同士の学び合い」を継続発展させていく上で、その事業化と組織化がわれわれの大きな使命であると考えています。

その視点でこれまでの各大学における実践をとらえると、『「教え合い、学び合う」という関係性は、大学内の人的資源活用のサイクルを生み出すものであり、キャンパスコミュニティの拡大再生産を促すものである』というわたしたちの仮定が実際の成果として証明されつつあると言えるかと思えます。

そうした意味でわたしたち大学生協は「学び合い」の育成が、情報教育だけでなく様々な場面で、学生のみならず教職員も含めた大学総体としてのキャンパスコミュニティの発展へ、貢献できるものひとつであると確信した上で、今後より一層取り組みを強めて行く所存です。

(文責：内赤尊記)

2006PCカンファレンス

CIEC活動報告

<2006PCカンファレンス速報>

開催概要

- ・開催日時 2006年8月3日(木)～8月5日(土)
- ・開催場所 立命館大学衣笠キャンパス
- ・開催テーマ 自由な学びか、トレーニングか ～教育とIT～
- ・主催団体 CIEC(コンピュータ利用教育協議会)
全国大学生生活協同組合連合会
2006PCカンファレンス実行委員会
- ・後援団体 立命館大学、文部科学省
京都府教育委員会、京都市教育委員会
- ・実行委員会
名誉実行委員長 長田豊臣 立命館大学学長
実行委員長 佐藤 満 立命館大学
実行委員長代理 松田 憲 立命館大学
副実行委員長 佐伯 胖 CIEC 会長(青山学院大学)

・参加の範囲参加者数

参加者の範囲：大学の教職員、生協職員、大学生、大学院生、小中高の教職員、その他教育研究機関の研究者・社員、企業の研究者・社員、一般市民
 予定参加者数：1000名

・参加費の範囲と金額

無料招待：講演会、シンポジウム、ITフェアなど
 有料参加：分科会、ポスターセッション、イブニングトーク、レセプション
 参加費：学生・院生 1,500円(当日2,500円)
 一般 5,000円(当日6,000円)
 (CD版論文集付き)

【全体会】

全体テーマ：自由な学びか、トレーニングか ～教育とIT～
 日時：2006年8月3日(木)10:00～10:20

【講演会】

講演題目：今日の学びを考える～徹底反復学習とICT機器～
 日時：2006年8月3日(木)13:00～15:30
 講演者：蔭山 英男(立命館小学校副校長)

【シンポジウム1】

テーマ：自由な学びか、トレーニングか ～教育とIT～
 日時：2006年8月3日(木)15:50～18:00

【シンポジウム2】生協職員部会企画

テーマ：大学の中で広がる自発的な学びあい～変遷する「情報教育」進展する「教育の情報化」の中で～
 日時：2006年8月4日(木)15:15～18:15

【シンポジウム3】小中高部会企画

テーマ：情報教育で子どもたちは何を学んできたか・何を学ぶべきか
 日時：2006年8月4日(木)15:15～18:15

【シンポジウム4】カンファレンス委員会企画

テーマ：大学に求められる新しい一般情報教育
 日時：2006年8月4日(木)15:15～18:15

<2005年度第2回運営委員会報告>

- 日時：2006年3月19日(日)10:00～13:00
 場所：大学生協会館(杉並)2階204・205会議室
 出席：綾皓二郎(石巻専修大)、一色健司(高知女子大)、上村隆一(北九州市立大)、小林昭三(新潟大)、佐伯胖(青山学院大)、武沢護(早稲田大学高等学院)、立田ルミ(獨協大)、松田憲(立命館大)、森夏節(酪農学園大)、矢部正之(信州大)、石川保広(オブザーバー、全国大学生協連)、高橋雅治(事務局)、羽田咲子(事務局)、
 欠席：赤間道夫(愛媛大)、生田茂(筑波大)、板倉隆夫(鹿児島大)、山口久幸(芝浦工業大生協)、湯浅良雄(愛媛大)、若林靖永(京大)、和田寿昭(全国大学生協連)
 議題：1. 2005年度事業報告と2006年度事業計画概要報告
 (1)2005年度の事業報告と2006年度の事業計画
 (2)各専門委員会・研究部会からの報告
 (3)2005年度決算見通しと2006年度予算案
 (4)研究会年間実施計画と交付金申請
 (5)2005年度プロジェクト事業報告
 2. 2006年度活動の方向性と役員体制について
 3. 2006PCカンファレンス開催準備の進行状況
 4. 創立10周年記念事業委員会報告
 5. その他

1. 2005年度事業報告と2006年度事業計画概要報告

2006年度CIEC定例総会議案を構成する各報告、計画について、次の通り報告があった。また、運営委員会開催時まで提出された研究会年間実施計画と交付金申請、および2005年度プロジェクト事業報告の内容を確認した。

- (1)2005年度の事業報告と2006年度の事業計画(報告者：矢部)
 (2)各専門委員会・研究部会からの報告
 1)カンファレンス委員会(綾)
 2)会誌編集委員会(高橋)
 3)ネットワーク委員会(矢部)
 4)国際活動ワーキング(小林)
 5)小中高部会(武沢)
 6)外国語教育研究部会(上村)
 7)生協職員部会(高橋)
 8)活動日誌(高橋)
 (3)2005年度決算見通しと2006年度予算案(高橋)
 (1)～(3)の報告に沿って行われた協議の中で次のような事柄を確認した。

・地域カンファレンスに対するCIECとしての方針を再度明確にする。支部設立の方針との関係や地域の自主性の尊重などの観点から改めて検討を加える。

・小中高部会を中心に準備が進む「高等学校教科『情報』の履修等状況調査」は、1校あたり50～100名分の回答を回収し、全体で20校ほどから協力を仰ぐことを当初の計画とする。実施に当たっては、これをCIEC全体の取り組みと位置づけ、郵送費を始めとする諸費用の負担についても配慮する。

・2006年度の予算計画には、予備費を一定の額で計上できるよう、見直しを加える。

・3つの部会への交付金は小中高部会45万円、外国語教育研究部会35万円、生協職員部会20万円とする第1次案を承認する。

Council for Improvement of Education through Computers

・従来行なってきたプロジェクト事業に対する評価、今後のあり方などを骨子とする総括を行なう。この議論には一定の時間が必要であり、然るべき結論を見出すまで、プロジェクト事業の実施は留保する。

・専門委員会規程の策定を検討する。とりわけカンファレンス委員会の役割と担当事項に関する内規の確立を重視する。三役が原案を検討し、運営委員会での協議を経て、CIEC 会則にしたがって、理事会で定める。

2. 2006 年度活動の方向性と役員体制について

(1) 司会の矢部副会長が、若林副会長の執筆になる問題提起「運営委員会への三役からのメモ」を紹介した。

・第2代会長に佐伯先生をお迎えし、CIEC は新たな学び・教育環境のデザインという方向をさらに意識して研究し実践していくことを活動の大きな柱として位置づけてきた。

・そのもとで、ここまで発展してきたことを肯定的にとらえつつも、未来の教育・学習環境を創造するという方向性が弱くなっていることに危機感をもつ。

・この運営委員会の場で議論をいただき、このようなビジョン、危機感を共有できるならば、その方向で来年度の CIEC の事業方針や役員体制の充実を具体化していきたい。

(2) 佐伯会長が発言した。

学術団体として「教育」に登録している CIEC の特質とこれまでの自身の役割に対する自己評価、また、いったんは会長退任を決意したことなどについて述べた後、先に紹介した問題提起を受けて、率直な議論がこの運営委員会で行なわれることを求めた。

(3) 意見交換に移り、6名の運営委員が発言した。

(4) 矢部副会長が次のように議論のまとめを行なった。

本日いただいた発言を受けて、未来の教育・学習環境を創造するというビジョンと、そのことを具体化する CIEC としての活動方針を引き続き検討しよう。佐伯先生にはもう一期、会長をお引き受け下さるようお願いするが、実際にはこのビジョンや活動方針の議論の状況も見ながら、ご判断をいただきたい。また、佐伯会長の次の会長候補を決めて、その方を今から副会長にお迎えしながら CIEC の日常活動を推進する方向性も充分検討せねばならない。

3. 2006PC カンファレンス開催準備の進行状況

松田委員が全体的な進捗状況を報告し、主に次のような点を確認した。

・この間後援の承諾をいただいた団体は立命館大学、文部科学省、京都府教育委員会、京都市教育委員会。

・シンポジウム4 (CIEC カンファレンス委員会企画) のテーマは「大学に求められる一般情報教育」とする。

・この新学学期にアンケートを実施する「教科『情報』の履修状況調査」だが、分析の結果を小中高部会企画のシンポジウム3, カンファレンス委員会企画のシンポジウム4で報告する。

4. 創立10周年記念事業委員会報告

矢部副会長が、第1回の記念事業委員会で協議した取り組みの案を報告した。

・2006PC カンファレンスなどを始めとして、2006年度に CIEC が行なう事業はすべて創立10周年記念事業と位置づける。

・10周年記念のロゴを作成する。

・記念切手の作成を検討する。

・講演会、座談会を企画する。

・この間の発表論文からピックアップした論集を編纂する。

・会誌、会報、その他の業績を CIEC として集大成するアーカイブを作成する。

・会誌上で理事会によるこの10年の振り返りを行なう。

・会誌編集委員会で10周年記念企画を計画していただく。

以上を協議の後、第3回運営委員会の開催を5月28日(日)と確認して、会議を終了した。

CIECからのお知らせ

<2006年度学会賞受賞候補者推薦募集>

2006年度学会賞の選考を学会表彰規定に基づき、以下のとおり募集、実施します。

■表彰の種類

1 学会賞 功労賞

コンピュータ利用教育にかかわる研究調査、啓発普及もしくは出版文化活動において、顕著な業績があったと認められる者。

コンピュータ利用教育に関し、画期的な業績によって特に貴重な学術貢献をなしたと認められる者。

2 学会賞 論文賞

本会の会誌またはこれに準ずる刊行物に論文を発表し、コンピュータ利用教育の発展に独創性および将来性をもって寄与したと認められる者。

■表彰選考の方法と条件

- 1 所定の推薦書による公募を行い、表彰選考委員会により、表彰規定に基づき総合的に審査する。
- 2 前年12月末日以前3カ年間の業績または発表された論文を対象とする。
- 3 推薦者および受賞候補者は推薦の時点において、本学会の会員であるものとする。

公募締切り 2006年4月30日(日)

詳しくは、下記の2006年度学会表彰実施計画をご覧ください。

<http://www.ciec.or.jp/ja/aboutUS/prize>

(推薦書は上記サイトからダウンロードできます)

<新年度会費及び会員名簿変更手続き>

2006年度会費納入のご案内と会員名簿変更手続き用紙を4月上旬にお送りいたしますので、よろしく願いいたします。ご所属と送付先等変更がございましたら事務局(jim@ciec.or.jp)までお知らせ下さい。